

安城合戦HOU MUCH?

～戦国大名・武士の懐事情～

三河安城小学校5年 河野 翔



安城合戦 Howmuch? ～戦国大名・武士の懐事情～

三河安城小学校 5年1組 河野 翔

1 研究のきっかけ

安城合戦を研究テーマにしようと思ったが、何について調べようかと悩んでいたところ、「戦国経済の作法」という本に出会った。武器や食料など戦国時代の様々な物の値段が書いてあったのが面白く、安城合戦の費用を出してみようとテーマに選びました。

2 研究の内容

まず安城合戦の概要を把握し、合戦に参加した織田松平側の人数、軍隊構成、軍需物資の内容・金額を調べて積算するという方向で進めました。また7月30日に刈谷市歴史博物館の山下学芸員に戦国時代の物資の流通などについてインタビューを行い、戦国時代の経済について考えるときのイメージをつけました。

(1) 安城合戦の概要

安城合戦とは、安祥城をめぐって、1540～1549年に3次にわたって起きた合戦です。今川氏の領土拡大を妨げようとする織田軍と、それに対抗する松平軍、今川軍が戦いました。最終的に松平軍、今川軍が勝ちました。

年代		軍	大将	戦の内容	結果
1540年 (天文9年)	第1次	織田軍	織田信秀	城を狙う織田軍3,000人とそれを防ぐ松平軍1,000人が戦った。織田軍の騎馬隊に対し、松平軍は徒歩隊が主で劣勢であり、一度は苦戦したが、松平長家を始めた武士50人余りが討死。双方1千人以上の損害を出したという。	勝利。城を獲る。
		松平軍	松平長家		敗北。
1545年 (天文14年)	第2次	織田軍	織田信秀	松平広忠は安祥城奪還のために出陣したが織田軍の挟み撃ちに合い劣勢に。松平軍の本多忠豊が身代わりで討死。	勝利。
		松平軍	松平広忠		敗北。撤退。
1549年 (天文18年)	第3次	織田軍	織田信広 平手正秀	今川軍20,000と織田軍800が激突。初戦は今川軍の本多忠高が深追いすぎて討死。約半年後、今川軍の太原雪斎が安祥城への攻撃を再開。猛攻の末、信広を生け捕りにした。	敗北。織田信広が人質。平手兵は撤退。
		松平軍・今川軍	太原雪斎		勝利。城を奪還した。

※「安城合戦物語」より

(2) 刈谷市歴史博物館 山下学芸員にインタビュー

① 戦国時代の戦事情

- ・トップが物資の準備について命令し、家臣が買い付けを行う。
- ・軍需物資は戦争の行方に直結するため、トップが準備状況を把握していた。
- ・大名が戦争の際に、「米を領地から出すな」と法令を出し経済封鎖をした。
- ・寺社勢力に借米をすることがあった。
- ・戦争が大規模化するのには小牧・長久手の戦い(1584年)以降。

② 大名の収入源

- ・戦時に寺社が禁制を大名に申請し、大名が禁制を発行する見返りに金納があった。
- ・職人は物納をした。
- ・年貢米は折換金された。
- ・お抱え商人は商売の特権の見返りに金納をした。

③ 物価・市場

- ・物価は地域によって違う。この時代に石高ではなく買高制。

- ・北条氏の資料で、城の普請の際に、労働者に1日50文とあり、1日の飲食代の参考にできるかもしれない。
- ・寺内などあちこちに市があり、本證寺にも市場があった。(「松平家忠の日記」)

④馬

- ・知立に馬商人がいた。
- ・地域に伝馬制度があり、宿場町で馬を飼っていた。
- ・伝馬制度は今川氏が領地内で発展させた。
- ・岡崎より西側の織田氏の領地は馬が足りない。
- ・戦国時代には、馬に乗る人は少なく、無理に用意するものではなかった。
- ・戦国時代は、馬1人、それに4〜5人が付き添い1つの単位となった。

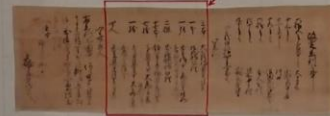
⑤織田・松平の事情

- ・織田領には尾張、津島、熱田の港があり、有力商人が付き、商人の資本があった。
- ・織田は鋳物職人に刀・鉄砲などをつくってもらえる環境にあった。
- ・兜や甲冑は革製品の職人が必要なことがあり、皮の扱いについては、京都の職人が多かった。
- ・松平は自分の領域内で米を十分に用意ができた。
- ・船は物資を運ぶのに有効な手段であり、刈谷の水野家、蒲郡の鵜殿氏(今川氏と協力関係)、竹谷松平家は水軍を利用していた。

(3)安城合戦の軍隊構成

武田氏、北条氏など先進的な大名は、所領の大きさから算出される質高に応じて家臣の軍役(兵の人数や装備)を決め、また持ち寄りの軍隊でそのまま戦闘部隊を構成したのではなく、再編成していた(「最新研究が教えてくれる! あなたの知らない戦国史」より)。

軍隊構成を検討する参考として「看到定書」があり、家臣が負担すべき軍役を列挙したもので、いくつもの資料があるが、「北条家看到書出(1572年)」を参考とする。北条家家臣の宮城泰業に36人の軍役が課され、構成は大小旗持3人、指物持(1個人を識別するマークを棒の先端につけたようなもの)1人、弓1人、鉄砲2人、槍17人、騎馬7人、馬奇馬(本人)1人、徒歩武者4人と書かれている(「戦国時代の表と裏」より)。安城合戦でも軍が再編成されているかもしれないが、他に参考となるデータがないためこれをもとにした。



←「北条家看到書出」
※国立公文書館より

ただし、鉄砲伝来が1543年とされ、最初に鉄砲が使用されたとされる加治木城の戦いが1549年のため、鉄砲兵を抜いて計算する。36人-鉄砲兵2人=34人を分母に計算。武士3%、騎馬兵20%、(四捨五入すると21%(0.205)になるが100%にならないため)、槍兵50%、弓兵3%、歩兵12%(刀)、旗持兵(指物持とまとめる)12%となる。まとめる以下表の通りになる。

計算例)第1次安城合戦の武士(家臣・領主)は $3000 \times 3\% = 90$ 人 以下同様に計算。(織田軍)

●軍隊構成の内訳

	大將	武士(家臣・領主)	馬兵	槍兵	弓兵	歩兵	旗持	計
第1次	織田軍 織田信秀	90	600	1,500	90	360	360	3,000
	松平軍 松平長家	30	200	500	30	120	120	1,000
第2次	織田軍 織田信秀	30	200	500	30	120	120	1,000
	松平軍 松平広忠	人数を記載した資料がないため計算できない						
第3次	織田軍 織田信広	24	160	400	24	96	96	800
	松平今川軍 太原雪斎	600	4,000	10,000	600	2,400	2,400	10,000

(4) 戦国時代の軍需物資・値段

「戦国大名の経済学」、「戦国経済の作法」を参考に、武器、防具、食料などの値段を以下の表にまとめました。

- ・米は500〜700文と本に書いてあったが間を取って600文で計算する。
- ・弓懸は弓を射るときに手にはめる革製のグローブのようなものである。
- ・刀については、太刀は馬場馬上では片手で持ち、比較的軽く攻撃力が高いが、すぐに折くのが重く、打刀という短い刀を両方腰に下げていた。
- ・旗の費用については、金額が書かれた資料が見つからず、「遣文北条3133号」に「腰に差す旗指物」は、金であるかのように支度すること。(現代語訳)」「(「兵農分離はあったのか」の戦国大名の百姓動員より引用)とあり、前後の文脈から自分で用意していたのではと推測されるため計算に含めないことにした。

● 軍需物資の値段

名称	値段(文)	参考
米1石(150kg) (「戦国大名の経済学」より)	600	「中近世日本の貨幣流通秩序」川廣史
槍1本 (「戦国大名の経済学」より)	1,000	「朝倉景季冬」
弓懸1つ (「戦国大名の経済学」より)	200	「賀茂別雷神社文書」
弓矢1セット (「戦国経済の作法」より)	1,000	
打刀1本 (「戦国大名の経済学」より)	太刀より安い数百文 500を最大として計算	「毛利家文書」
太刀1本(実用品) (「戦国大名の経済学」より)	500	「毛利家文書」
馬1匹 (「戦国大名の経済学」より)	3,000	「毛利家文書」
具足1人分 兵卒 (「戦国大名の経済学」より)	4,600	

(5) 兵糧米と戦争の期間

第1次合戦に関しては天文9年(1540)6月6日に織田信秀が安祥城を3千の兵で囲み、松平兵が応戦し、一度は織田勢を撃退したが、松平長家始め50余人が討死にしたとある(「新編安城市史」)。また安祥城奪取(信秀の)の年については諸説あるが「新編安城市史」に「永見氏家譜」より永見貞近が天文9年6月9日に安祥城で戦死したと記してあることから戦いは天文9年6月9日とみてよいと書かれているため、短期決戦であったと考えられる。

第2次合戦に関しては、天文14年(1545)に松平広忠は安祥城を攻撃し、本多忠豊が身代わりとして討死したとされるが、その時期について「参州本間氏覚書」は同年2月「雲院過去帳調」では同年9月20日とされている(「安祥松平の研究」より)。広忠が安祥城を攻撃した月が分からないが、いずれにせよ短期決戦であったと考えられる。

第3次合戦に関しては、天文18年(1549)3月6日に松平広忠が家臣の岩松八弥に殺され、嫡子竹千代が田原城主戸田康光の謀略により織田信秀の手に奪われ、今川義元がすぐに岡崎城を接收させ、大原雪斎に安祥城を攻めさせている。「三河国聞書」より雪斎らは3月19日に安祥城を攻めたが城を落とせず、岡崎城に兵を引きあげている。その後大きな衝突がしばらくなかったが、今川軍と織田軍の対峙はずっと続き、安祥付近はいざいざ戦火にみまわれた。「三河古文書」より9月18日に戦いがあったことがうかがえ、岡崎城と安祥城の間に緊張状態が続き、11月8日に今川軍は安祥城を完全に包囲し、信広は降伏した。そして11月10日に竹千代と信広の人質交換がされた。

第1次と第2次は短期決戦であったことから、それぞれ1ヶ月(30日)で兵糧米を計算する。また第3次は3月の戦いと9月以降は城を本拠地にして、にらみ合いが続き11月に本格的に攻めていることから、1ヶ月×2回=60日で兵糧米を計算する。

(6) 積算

●兵糧代(3文(1日1人あたり))

	兵士の数	日	兵糧代(文)
第1次	織田軍 3,000 松平軍 1,000	30	270,000 90,000
第2次	織田軍 1,000 松平軍 -	30	90,000 -
第3次	織田軍 800 今川軍 20,000 松平軍 -	60	144,000 360,000

進行中の足輕が1日5合の米の支給を受けていた(「戦国軍の作法」として、1石(1000合)が600文とすると1合は0.6文。1日あたり1人にかかる兵糧代は3文となる。第1次合戦、第2次合戦をそれぞれ30日、第3次をそれぞれ兵糧を60日用意したとすると左の表のとおりとなる。

計算例) 第1次織田軍 $3,000 \times 30 \times 3 = 270,000$ 文

●各隊の装備代(1人あたり)

	槍	弓懸	弓矢セット	打刀	太刀	馬	具足	合計(文)
家臣・領主				500	500	3,000	4,600	8,600
馬兵	1,000			500	500	3,000	4,600	9,600
槍兵	1,000			500			4,600	6,100
弓兵		200	1,000	500			4,600	6,300
歩兵(刀)				1,000			4,600	5,600
旗持				500			4,600	5,100

「北条家書」再掲	
①三本 大小旗持・具足・皮笠	旗持
②一本 指物持・同理	旗持
③一張 歩弓侍 甲立物・具足・指物・挽	弓兵
④二挺 歩銃砲・同理	銃砲兵
⑤十本 金遣・二間・中柄・具足・皮笠	槍兵
⑥七騎 馬上・具足・甲立物・手蓋・指物何にても	騎馬兵
⑦一騎 自身・具足・甲立物・手蓋・面防(頬)・馬鎧金	領主・家臣
⑧四人 歩者・具足・皮笠・手蓋	歩兵

※手蓋=籠手・立物・かぶとにつける裝飾物 面防=顔面を覆うようなもの

前掲、宮城泰業あての着到も用いて上記の表を作成した。作成にあたって、

- ・「戦国大名の軍計事情」より歩兵武者について、「弓や槍などの武器の指定がないので、刀で戦ったのだろう」と記載があり、刀持ちで計算する。
- ・騎馬兵は弓・槍のどちらかを持っていたと思うが、槍が主流になる時代の傾向から槍を持っていたとして計算する。
- ・騎馬兵は経済力がないと騎馬兵になれないため、太刀ももっていたと思われる。
- ・足輕の装備や戦国絵巻より、合戦の参加者は基本 刀をもっていたと思われる。
- ・戦国時代の足輕は大小の刀を差している(「ビジュアル合戦雑学入門」より)ため刀2本の値段で計算。

これを第1〜3次の安城合戦に当てはめる。(3)の軍隊構成に上記の表の単価を当てはめる。

●武器・兵糧代積算表(文)

	大將	武士(馬)	馬兵	槍兵	弓兵	歩兵(刀)	旗持	武器計	兵糧米	総計
第1次	織田軍 織田信長 774,000	5,760,000	9,150,000	5,670,000	2,016,000	1,836,000	20,103,000	270,000	20,373,000	
	松平軍 松平長家 258,000	1,920,000	3,050,000	189,000	672,000	612,000	6,701,000	90,000	6,791,000	
第2次	織田軍 織田信秀 258,000	1,920,000	3,050,000	189,000	672,000	612,000	6,701,000	90,000	6,791,000	
	松平軍 松平広忠 人数を記載した資料がないため計算できない									
第3次	織田軍 織田信成 206,400	1,536,000	2,440,000	151,200	537,600	489,600	5,360,800	144,000	5,504,600	
	今川 松平軍 太原雪斎 5,160,000	38,400,000	61,000,000	3,780,000	13,440,000	12,240,000	134,020,000	3,600,000	137,620,000	
●鎌倉赤田城算						合計 172,885,800	4,194,000	177,079,800		

●積算表円換算

	総計(文)	1文=60円	1文=80円
第1次	織田軍 20,373,000	1,222,380,000	1,629,840,000
	松平軍 6,791,000	407,460,000	543,280,000
第2次	織田軍 6,791,000	407,460,000	543,280,000
	松平軍 -	-	-
第3次	織田軍 5,504,800	330,288,000	440,384,000
	今川 松平軍 137,620,000	8,257,200,000	11,009,600,000
	177,079,800	10,624,788,000	14,166,384,000

円

結果〇〇

- 第1次 織田軍が 12〜16億!
- 松平軍が 4〜5億!
- 第2次 織田軍が 4〜5億!
- 松平軍が 3〜4億!
- 第3次 今川 松平軍が 83〜110億!

第1〜3次の戦争で約106〜142億の概算費用がかかったのではないかと結果が出た。

※第2次の松平軍は...

3 まとめ・感想

安城合戦の軍需品用意には、各軍数億から数十億の費用がかかっており、歴史上そんなに知名度がない合戦でも1000人単位の兵士が動く大きな費用がかかることに驚いた。大名の経済力の大きさや、戦争に負けた時のダメージが非常に大きいことが分かった。

安城合戦の時代の信頼できる資料が簡単には見つからなかったことから、戦国時代の通説が変わることがあるのが納得できた。

戦の経済は非常に複雑で、今回の積算がその難さを表しているとはいいい難い。ただ中世というはるか昔の戦争をイメージするのに金客員を出すことで少しでもリアルに戦争のイメージを感じることができたのではないかと思う。

最後に、戦国時代の名の懷事情を考えるヒントをくださった刈谷歴史博物館の山下学芸員にこの場を借りてお礼を伝えたい。

4 参考文献

- ・監修 小和田哲男(2020年)、『戦国 経済の作法』
- ・安城市歴史博物館(1994年)、『安城物語』
- ・渡邊大門(2018年)、『戦国時代の表と裏』
- ・渡邊大門(2021年)、『戦国大名の戦事情』
- ・盛本昌広(2020年)、『軍需物資から見た戦国合戦』
- ・西股総生(2017年)、『戦国の軍隊』
- ・川戸貴史(2020年)、『戦国大名の経済学』
- ・安城市史編集委員会(2007年)、『新編安城市史1 通史編原始・古代・中世』
- ・天野暢保(1984年)、『安城松平の研究』
- ・中山豪、大山裕(2015年)、『戦国武器甲冑事典』
- ・平井上絵(2017年)、『中世から近世へ 兵農分離はあったのか』
- ・東郷隆上田信(2018年)、『ビジュアル合戦雑学入門』
- ・かみゆ歴史編集部(2016年)、『最新研究が教えてくれる! あなたの知らない戦国史』
- ・監修 小和田哲男(2018年)、『戦国 戦の作法』